《資 料（翻訳）》

ダン・アイーディ　『聴取と声：音の現象学』より
第5章 第1節

阪　井　　恵

キーワード

聴取（Listening）／音（sound）／現象学（phenomenology）

解説

本稿は、Don Ihde, *Listening and Voice: A Phenomenology of Sound,* Ohio University Press, 1976. の第5章の冒頭部分の1節を翻訳したものである。同書は2007年に、モダンテクノロジーを介した様々の聴取について論考した章などを加え、*Listening and Voice: Phenomenologies of Sound,* State University of New York Press, 2007. として再出版されている。著者のDon Ihde（1934～）は、アメリカの哲学者、ポスト現象学者で、現在ニューヨーク州立大学ストウニー・ブルック校のDistinguished Professor of Philosophy である。*Acoustic Technics*（2015）, *Heidegger's Technologies: Postphenomenological Perspectives*（2010）, *Embodied Technics*（2010）, *Bodies in Technology*（2001）, など、テクノロジーに関する哲学的論考を中心に22冊の著書がある。本書*Listening and Voice: A Phenomenology of Sound*は、言語、音楽、宗教そして沈黙を通した音あるいは聴覚について、ハイデッガーやフッサールの業績を踏まえ、現象学的な思考実験を丁寧に展開して書かれている。

私はこれまで音楽の学習について研究する立場から、音、聴覚、聴取について多角的に考察してきた。本書との出会いもその文脈におけるものである。ここ数年、教育一般の視点から「きくこと」の重要性がクローズアップされる傾向が強まっている。本書は日常生活における聴覚から、いわゆる「内言を聴く」といった問題までを緻密に取り上げており、教育学の領域でも踏まえるべき先行研究として、訳出の価値があると考える。

本書は一見平易な言葉で書かれているようだが、翻訳のためには、特にハイデガーやフッサールの哲学とその用語についての知識が不可欠である。本稿の作成に当たり、村井則夫教授（明星大学人文学部）より丁寧な御指導を賜った。厚く御礼を申し上げる。

第５章　音の姿

視覚と聴覚の間の近接性は、同時に両者の差異を開くものだが、いまやその差異の意味を問わなければならない。見えないものを見えるようにする運動に対して、黙しているものに声を与える別種の運動も可能であるならば、聴覚的次元自体をより詳密に聴くことが要求される。ここからの聴取は反省的であらねばならない。私は自分の聴取について注意し始め、まず、疑いようもない動的な時間性を特徴とする絶えざる流れに気づき、連続的な領野を発見する。

一定の時間内における聴覚的経験を列挙し始めると、僅かの間にも、一連の音の出来事が起こっていることに気づく。階下では掃除機の音がしている。隣家で大工がこんこんとたたいている音がする。葉がさらさらとこすれあう音が時々する。あまり目立たない音にも注意を向けるならば、蛍光灯のぶーっという音、暖房機器のうなりも聞こえる。しかし私はまた、安易で性急に過ぎるかもしれないが、聴覚的世界は「流れ」であり、本来的に***時間的である***と結論する。

私は目を閉じ、一つの音がまた一つの音に続くこと、一つの音が一瞬「存在し」て「滅する」こと、時間のうねりが劇的に現前するこの「領野」には「非連続性」があることに気づく。このような時間性と聴覚経験の親近性は、音に関する中心的伝統を形成し、セーレン・キルケゴール、エトムント・フッサール、P. E.ストローソンなど多様な見解をもつ哲学者によって書き留められている。私が初めに「発見する」ことは、既に知られ、知識として蓄積されている。

感覚に訴える媒体としての音楽と言語を仲介するのに、キルケゴールは次のように書いた。「想定しうる最も抽象的な理念は感覚的天才性である。しかし、このような理念とは、いかなる媒体において表現可能だろうか？ 音楽だけだ……音楽は、その叙情的質全体において、エネルギー、嵐、苛立ち、情熱などである。」[1] しかしまた、言語の聴覚的次元に注目し、彼は言う。「言語は耳に訴える。他にこれをする媒体はない。耳は、諸感覚のうちで最も精神的に規定されたものである。言語以外では、音楽が唯一、耳に訴える。」[2]

言語と音楽は、聴覚的現象であり、キルケゴールによって、それが現実に生起する形式においては優れて時間的と理解されている。「言語はその要素として時間を含んでいる。その他すべての媒体は、その要素として空間を含む。音楽は言語以外に唯一、時間の中に生起するものである。」[3] このような時間に対する音の***構成的な***関係は、反省的聴取においては、文脈上「まず始めに」現れるものである。これはフッサールの*『内的時間意識の現象学』*において、現象学が聴覚的素材を使用する点に、そのまま維持されている。この講義においては、彼が通常使用する視覚に関する例が、しばしばそして支配的といえるほどに聴覚の例に置き換えられているばかりでなく、言語を隠喩的に使用する場合でさえも、それがある種の聴覚的な響きを帯び始めている。「鳥はその位置を変え、飛ぶ。あらゆる状況において、より以前の見えの残響は、それ（つまり、その見え）に纏い付いている。この残響のあらゆる位相は、しかしながら、鳥がさらに飛ぶにつれて消えていく。こうして、一連の「***反響***」は、すべてのそれに続く位相に纏い付いており、私たちは単純な位相の系列をもつのではない。」[4] キルケゴールと共に、フッサールも音と時間の圧倒的な親近性に注目している。

しかしながら、このような音と時間の親近性が音に関して「伝統的」であり、いかなる聴覚経験の分析においてもこの強い結びつきが念頭に置かれる場合、聴取はそれゆえ空間的には「弱い」、または極端には***音は全く空間性を欠いている***といった否定的な主張が、暗黙的であれ明示的であれしばしば存在する。この否定的な主張は、まさしく、諸感覚をきわめて明快に「要素分解し」それらを最も下位の形態に還元する伝統、すなわち経験主義の伝統において露骨である。この見解は、生物学や物理学において近年急速にその根拠を失いながらも、なお「空間的秩序は、視覚、触覚、運動感覚の領域にとってのみ生得的なものであり、一方他の感覚の場合は、感覚が単純に空間的特徴と混合することがあり得る。」[5] と断言することがある。

このような見解は、ストローソンの『個体と主語』においては顕著である。ストローソンは、視覚と対象化という視覚中心主義を保持しているアリストテレス的伝統における「対象の形而上学」を明白に擁護しつつ「非－空間世界」を想定し、それを「純粋な」聴覚が還元された世界の、概念的な可能性と捉える。

> 感覚経験がその性質において聴覚的であるばかりでなく、少なくとも触覚的で運動感覚的でもあるようなところでは、私たちは純粋な聴覚的印象にも空間的な述語を与えることができる。しかしこの事実があるにせよ、このような経験を専ら聴覚的な性質のみで考えるとしたら、そこに何らかの空間的概念のための余地があるとは言えない。このような空間的契機が存在しないことは***明白だと思う***。[6]

「明白」なのは、聴覚経験には非常に複雑な空間的属性があるという現代の諸発見を全く考慮していない、ひとつの伝統がここに前提されているということである。小型クジラやコウモリなどの動物で著しく発達し人間にも欠落しているわけではない、方向と位置の定位感覚は、反響定位（エコーロケーション）がいかに精確な空間感覚であるかを示してきた。コウモリが音の「光線」を「焦点化」し、前方にある小枝と蛾の差異を識別できることは、現在は遍く知られている。しかしこのような聴覚的能力は長い間、聴取について空間性を否定してきた伝統に閉じ込められていて、数十年いや数百年にわたり、科学者が空間性は聴覚と聴取のための受容器であると考えるのを阻害していた。

ラザロ・スパランツァーニは既に1799年にコウモリで実験を行い、「コウモリは目ではなくて耳に導かれて飛んでいるのではないか」と問うているにもかかわらず、古代からの既に確立された先入観が、スパランツァーニをして自らの発見を否定的に考えさせた。聴覚は、「空間の中で」対象物を探り、その場所を特定することを可能ならしめているのではないかという示唆さえ、ジョルジュ・キュヴィエやジョージ・モンターグのような卓越した人々によって厳しく排撃された。1912年にようやく聴覚は「空間化できる」という示唆から、動物全般の持つ反響定位に関する現代の知識につながる問いが再開された。これは今日、視覚障害者がその既にきわめて正確な聴覚を、さらに拡張することのできる増幅装置の開発につながっている。

聴覚的次元への転向において「第一の所与」であるものが当然のように後回しにされてしまうのは、経験から自明なのではなく、経験に関する伝統にとって自明であるにすぎない。音と時間の親近性を否定せずに、また聴覚的なものの、時間性とかかわる豊かさを否定せずに、様々なアプローチを手引きに始まる戦略は、聴覚的経験の一見弱く見える能力においても提示されるであろうものを見逃さない・聞き逃さないよう、細心の注意を払っ

て展開すべき戦略である。こうして現象学の固有領域への移行がなされるにあたり、記述が始められるのは、音の空間性からである。様々な段階をもつアプローチを捉える見方において、音の「最も弱い」可能性は「最も強い」可能性以前に探求されるべきなのである。

しかしながら、このような現象学的記述を始めるに際しては、留意しなければならない幾つかの最初の資格づけがある。第一に、感覚的原子主義のうちに始まったより抽象的なアプローチからの運動は、諸感覚の分割から加速度的に遠ざかる運動であるばかりでなく、ここで経験の最初の実在的な水準と呼ばれるもの、すなわち「純粋な素朴性」の水準を主題化することにおいて始まる運動でもある。というのは、フッサールの*『論理学研究』*における同一性の議論は高度に専門的であるにもかかわらず、その成果は、素朴な最初の実在的な経験における事物の優位を再確認する成果だからである。私たちがひとたび、これらの事物がどのようにそれ自身をあらわす「べきである」かに関する信念の層を除去してしまったならば、素朴な普通の経験において私たちが注意を払うのは、事物なのである。

同じことが、聴覚的経験にもあてはまる。音は、「まず」事物の音として経験される。あれは削岩機で、うるさく掘削をしている。ほら、今エリックがレスリーを呼んでいる。通り過ぎたのは、乗用車ではなくトラックだ。このように、私たちが当然のごとくに音によって事物を「同定する」容易さは、私たちの日常に展開している経験の一部である。この誰もがもっている聴取能力は、その内部に驚くべき豊かな識別と、聴覚的テクスチュアの微細な差異を判別する能力を含んでおり、それによって私たちは自らの聴取対象が、何に、そしてしばしば何処に関するものかを知ることができる。

このような能力の、尋常ならざる例は***音楽的聴能力***に見出されることがある。たとえばベートーヴェンは、知覚上も想像力上も豊かで並外れた聴覚的能力を持っていたので、作曲した交響曲全体を頭の中で想像的に聴くことができ、ピアノで音を確かめることを決して是としなかった。なぜならピアノの音は彼の頭の中の響き全体に比べてずっと貧弱だったからである。しかし、この音楽的、知覚的記憶力は、ベートーヴェンほど精度が高くはないまでも、優れた音楽家の間では珍しいことではない。

このような音楽的芸当は、誤解を招きやすいものでもある。なぜなら、上述のキルケゴールの言葉のように、音楽は「抽象的」だという伝統も存在するからである。現象学者たちでさえ、音楽経験を脱身体的経験、一種の「純粋な」聴覚的経験として、「その音源からは切り離された」経験のように考えるという誤りを犯してきた。[7]

日常の中では、このような抽象的な聴取は少なくとも普通とは言えないが、聴覚が示す識別力は非常に優れたものである。ウェールズのスランゲヴニで村の通りを歩きながら、私の息子はツグミがカタツムリをさかんに路傍にたたきつけていると指摘した。この行為はガーリックとバター抜きではあるが、やがて美味しい食事という結果をもたらしたわけである。数週間後の早朝、私はロンドンの自宅でカーテンを下した窓を通して、カタツムリの殻が割れるまごう方なき音を聞いて目覚めた。私はカーテンを引き、妻に彼女にとっては初めてのこの出来事を伝えたが、私にとってはそれがカタツムリだと同定することは、殻の割れる音によって、はなはだ「明白」だった。

微細な聴覚的差異に基づくこのような同定や識別は、まだ「空間的」ではない。しかし、音がまず事物の音であるところの、経験の最初の素朴かつ実在的水準に注意を転じると、その経験の空間的側面が姿を現し始めるだろう。音の空間性を探り当てることにおいて、

先に挙げた用心が、ここで特定の形をとることになる。第一に、聴覚的な空間性は、それが経験のこの水準に「現れる」ときに、「現前する」ことを許されなければならない。逆に言うと、空間性はもっぱら「視覚的に」判断されるという、空間性についての先入見は保留されなければならない。

第二に、最初の経験の包括的性格の現象学的意味を確かめながら、諸感覚の細分化という見方をやめ、包括的な経験の次元を***程度の差に焦点を当てて類別化する***という見方に置き換えねばならない。それ（***程度の差に焦点を当てて類別化する***こと ― 翻訳者注）は、包括的な全体性を必ず背景にする。こうして「素朴」な経験は削除され不可能とされる。原初的には、事物は常に素朴かつ実在的な経験において既に「合成されている」。包括的経験を　焦点－周辺　解釈へと移行させることは、こうして脱身体化に向かおうとする傾向から身を守る。すべての「デカルト的」タイプの哲学はこの傾向をもち、それでいて、知覚的な用語といたずらに仮説的な用語とをごた混ぜにするのである。

第三に、最初の現象学的アプローチは、感覚原子主義の渦中にあるアプローチとは対照をなすものであり、厳密に言えば空間と時間を分けることさえも、原初的経験にはない、ということは注意されねばならない。実在的には、ある具体的な空間－時間というものがあり、それはまた、素朴な経験をその主題化された見えにおいて意味づけるものである。

第二のアプローチ、すなわち聴覚的次元の「弱さ」へ踏み込むことと共に、現象学に固有の領域が始まる。普通の経験における事物の音の暫定的な性格は、現象学的な経験分析の、最終の水準ではなく最初の水準と考えられるべきなのである。

【文中の注番号】

原文では各注番号について英語翻訳版書籍のタイトルと該当ページが示されている。
本稿では、邦訳のあるものについては、邦訳書のタイトルとページを記した。

1）セーレン・キルケゴール『あれか、これか』(浅井真男訳『キルケゴール著作集　第1巻』みすず書房、1963、p.96.)
2）同上書、p.113.
3）同上書、p.114.
4）エトムント・フッサール『内的時間意識の現象学』(立松弘孝訳　みすず書房、1967初版p.150.）イタリックはIhdeによるものである。
5）Erwin W. Straus, *Phenomenological Psychology*（エルヴィン・シュトラウス『現象学的心理学』邦訳なし）より。
6）ピーター・ストローソン『個体と主語』(中村秀吉訳　みすず書房、1978、p.78.)
7）Erwin W. Straus, 前掲書より。